

## 第8回池田町・地方創生戦略町民会議 議事概要

- 開催日時 令和2年10月29日（木）14：00～17：00
- 場 所 能楽の里文化交流会館2階 大会議室（小会議室）
- 出席者 委員16名 行政10名 事務局4名
- 傍聴者 1名

### □ 開会

#### □ 委員長挨拶

本日はなかまの第1回目ということになっており、これまで以上の熱心なご協議をお願いする。

#### □ 確認事項

##### （1）「なかま」分野について

総務財政課長が資料に沿って説明

#### □ 協議事項（グループワーク）（大会議室・小会議室）

##### ○「なかま」分野における意見交換

#### □ 意見交換・総評

委員長：論点1の「『ようこそ赤ちゃん事業』や『ママがんばる手当事業』などの今年度末までの補助や『ほっと保育室』などの支援は引き続き必要か？」をグループ1（以下、G1）、グループ2（以下、G2）、グループ3（以下、G3）の順でお願いする。

G1： 論点1について、IターンやUターンの若い世代が増えるためにも、必要であり、一学年20人は、競い合いやクラスの形成上、適しているのではないか。また、3歳まで育休を取得した時に経済的に不安がある若い世代、子育て中の親には支援が必要である。「ママがんばる手当」は、今の制度は一律なので、総額は一定にして、薄く広くする。例えば、3歳までだけでなく5歳までを選べ、総額36万円を3年でなく、5年で分割するなど、育休年数など様々な選

択肢があるので、親が選べる形もありではないか。「ようこそ赤ちゃん事業」は、第1子だけだが、金額を少し下げるなりして第2子、第3子と子どもを増やすためにも長い支援も必要でないか。「ほっと保育室」は、人件費等がかかっているので、有料にしても良いのではないか。

G2：なかまに関する基本目標の「小さな強み、小さな不安をつながる関係が支える幸福を創造する」の「小さな強み」や「小さな不安」は何かを各自1個ずつ出した。「小さな強み」は、ご近所、池田町全体で顔が見える関係、ちょっと預けることができたり、叱ってくれたり、見てくれたり、共助が整っている。子どもは池田町全体のみんなの宝だということだ。また、自然環境で思いきり遊べる。少人数のメリット、教育や保育が手厚い、診療所もすぐ見てくれるということもある。「小さな不安」は、高校への通学が不便なので、部活動の後等に友達と交流する時間が少なく、友達ができにくい。また、子どもが少ないので、競争心が生まれにくい。そして、部活動の数も少ないので、部活の選択肢も少ないということだ。これらを踏まえ、「ようこそ赤ちゃん事業」は働きない母親への経済的不安や心の不安を解消するのに必要ではないか。ただ、一律ではなく、母親の所得に応じて、条件付きで少し金額を下げても良いのではないか。また、ベビーベッドやベビーカーなど子ども用品は一時的なものなので、不要となった人が必要な人に譲ったりレンタルできたりすると良い。「ママがんばる手当」のうち、1万円を将来に残し、小学校や中学校の入学時に転出する人が多いので、大学進学時や就職時に池田で育った子にお祝い金として支給しても良いのではないか。社会福祉協議会の「すみずみ子育てサポート事業」は、出産してから1か月間程度、家にご飯を作りに来てくれ、非常に助かるので、続けて欲しい。今ある子育ての事業はできるだけ継続して欲しい。

委員長：「ようこそ赤ちゃん事業」や「ママがんばる手当事業」が元々できた経緯は、産休・育休時に所得が無くなることへの補償という意味合いが強かったという理解で良いか。

保健福祉課長：3歳まで育児休暇制度もあり補償の面もあるが、育児は3歳まで大変手がかかる時期なので育児頑張ってという気持ちでこの制度ができた。

委員長：育休を取得していることが条件か。

保健福祉課長：そうなってはいない。

委員長：そもそも育休取得中の所得補償なのか、子育て応援なのか、子ども一人あたりの手当はあるが、母親には子どもの数に関係なく同額なので、目的と中身を一致させる必要がある。

G3：「ようこそ赤ちゃん事業」は現状のまま継続で良い。「ママがんばる手当」は、今の子育て支援は、小さい子には手厚いが、小学校、中学校、高校となるにつれ、薄くなっていくので、総額は同じで、期間を高校生ぐらいまで延長して良いのではないか。「ほっと保育室」は、1日や半日単位で有料として良いのではないか。また、子連れ出勤で仕事をしつつ授乳もできるような子育てにやさしい事業所への支援もあって良いのではないか。

委員長：次に、論点2の「子育てを地域で応援するためにどんな取組みができるか？」について発表をお願いする。

G1：農業の取組みなど機会を増やす必要がある。昔は夏祭り、バーベキュー、海水浴など、地域の保護者や老人会などの様々な取組みがあった。今年はコロナで行けていないこともあるが、こうした地域の行事をすることができるのでないか。また、子どもの通学時になかなか親がついて行けないが、こっぽい屋の集荷トラックを待つ地域の年配の方たちの前を子どもが通った時に挨拶をしてくれる。子どもも嬉しくて挨拶を返す。このように地域の方たちに見守られている。もし何かあった時に、子どもも普段声をかけてもらっている方たちに助けを求められたり、不審な車が通っていたら、年配の方たちも気を付けてくれたりするようになるので、日々の些細なことから始められると感じた。それから、この地域の方たちがかつてお米を作ったり、山で木を切ったりして、生計を立ててきたことが今の池田につながり、今の自分たちがある。地域の取組みをすることで、自分の存在と過去とのつながりを子どもたちに伝えられ、子どもたちが大人になってからも、池田への思いを持ち続け、池田に帰っててくれるのではないか。また、改めて誇りを取り戻す、改めて元気になるきっかけになるのではないか。最後に、住民が子育て支援センターなど保育関連は専門性があるので、気軽に参加できないのではないか。

委員長：自分の存在と過去のつながりを学ぶというのはすごく大事なところであるが、何か具体的な話は出たか。

G1：昔のやり方はできないかもしれないが、田植えして、稲刈りして、そのお米を食べて収穫祭をするという話は出た。

G2： 「小さな強み」は、池田町は周りの人とみんな知り合いであることや池田の子どもは宝であることと話した。少し前まではご近所で海水浴に行ったり、子どもをたくさん集めて甲子園に連れて行ったりした。地域の祭りや子ども神輿があり、子どもの遊び場がたくさんあり、芋掘りなどの経験も昔はできた。今はそういう良い環境にある子どもたちは一部ではないか。地域全体で池田町の子どもたちに経験させるには、教育として学校で行う農業体験（種蒔きから収穫・販売まで）は非常に充実しているが、集落単位だと過疎化が進んでいて、集落や集落営農などでの実施は難しい。各地区振興会の方々に少しお願いしてイベントや体験をしてもらったりするのはどうか。

委員長：最近は事故があったらどうするのだというややこしい問題が出てきているが、集落単位というよりも地区レベルで取り組んではどうかということですね。

G3： 子どもの声を聞いているのは、ほぼ皆さん気持ち良いと思うし、子どもが多くいると挨拶し合える環境ではあると思う。地域や集落単位で取り組もうとしても、なかなか難しいと思うので、老人クラブなどの活動なり、様々なグループの人が集まって行事を作ることも良いが、保険をかけていても怪我したらどうしようとリスクを考えてしまう難しい点はある。学校の取組みで村 de キャンプや俳句などあるが、子どもにとっては良い経験になるし、学校に直接関係ない人も参加できれば、更につながりが出来て、様々な交流ができるのではないか。

委員長：例えば「『ようこそ赤ちゃん事業』で出産時の不安を持つお母さんを支援する」とあるが、出産時におけるお母さんの不安というのは、そもそも何があるか。お金を工面したらそれでいいのか。その点はどうか。

委員： 私たちの時代は確かに制度的にお金があったら良かっただろう。産前産後休暇のお金と、児童手当などもなかったので、今と比べれば手厚くない。20万円もらえたなら非常にありがたかったであろう。昔は産前6週産後8週の休みで、8週終わればすぐ仕事に行かなければならぬと思っていた時代なので、20万円あればすぐ仕事に行かなくても良いと思ったのではないか。

委員： 少し前の時代と今の時代では大分手厚さも違って、今では児童手当以外にもお金がもらえるので本当に助かるが、最近はメンタルで弱る親も多いので、その不安を解消できるママ会やお茶会とか開くコミュニティなど、経済面と精

神面の両方でサポートしていくのが良い。

委員長：お金や事業に繋がりにくいかもしれないが、精神面での支援も当然必要かと思う。その具体化については次の論点2にも絡んできて、地域で子育てなり、応援したり、親御さんの相談役になったり、見守る活動などに繋がっていくのだろう。今日の資料で気になった点は、3枚目のスライドの2行目の「子育てに男性の参加不足」というところだが、重要ではないか。この点については、何か議論があったか。とにかくママなのか。働き方改革、働き方の問題とも関係するが、夫が子育てに加わらないといけないのではないか。

委員：自分も大分昔の話で母親任せだった。会社で男性が2～3か月前に育休取られた方が一人いた。今はもう戻って仕事している。

委員長：これは会社側の姿勢も改められないとなかなか難しい面ではある。北欧のノルウェーがパパ・クオータ制度という、クオータは割り当てるという意味だが、パパも子育てに時間を割り当てなさいという趣旨の父親の育児休暇を支援する制度を導入した。そういうことも男女共同参画社会では必要ではないかと思う。

論点1では、3歳までに集中して支援するやり方を、5歳までなどもう少ししなだらかに支援する案、あるいは、小学校入学、中学校入学、高校入学などのお祝い金はあるが、スポット的に大学進学時や就職時に支援する案も出たので、お金の配分の仕方、あるいは、選択的に柔軟な制度が必要ではないかということが大体どのグループも一致していたと思う。

論点2は、これまでの議論とも関係するが、農業や農村の小さな強みを生かすことが必要ではないか、また、集落や地区で子どもの見守り活動とか行事への参加を促すことが必要ではないかということが大体どのグループでも出たと思う。地域で見守る、応援するという場合に、地域で子育てを応援する団体は社協だけか。子育てNPOや農協の助け合い活動や生協等の他にないのか。

事務局：民間の「いけだのそら」というグループが子育てサロン活動をしている。「ちっちゃな幸せ実現事業」という町の補助金を活用して活動している。

委員長：それは池田町の人たちが、池田町の子ども達を対象にやっているのか。

事務局：主にそうである。

委員長：地域で応援するという場合の地域は一体何かという話で、集落や近隣で応援することも考えられるが、地域でそういう活動をしている団体にもっとみんなが関心を持つことができれば、そこに積極的に協力していくなども大事だと思う。要は役場以外でこういう応援をどのようにするかだ。

副町長：一緒に考えていきたいことであるが、資料の3枚目で、衝撃的な数字で、出生率（若年女性子ども比）は1.08、18歳未満の人口割合が15年間で10%になっている。短絡的に子どもを産めば良いということではなく、このままいくと本当に2030年には子どものいない家庭ばかりとなるが、社会としてどうしたらよいか。補助金を出すのではなく、この問題にどう対応していくか、皆さんのお気持ちを聞かせていただきたい。

委員：この数字には驚いたが、2015年と2020年はもう少し緩やかだと思うが、ここまで激減していないだろう。1学年20人ぐらいを保つために本腰入れて考えなければならないのではないか。補助金が手厚いうちは池田において、小学校や中学校に入学するタイミングで出していく人が多いが、補助金のことだけでなく、子どもが大きくなると、たくさん友達がいるところで育てたいとか、競争心を芽生えさせたいとか、様々な思いがあると思う。

企画幹兼農村政策課長：小学校を機にとかいうのも十分強みを活かせていないのではないか。日頃感じることはみなさん口に出して言えば良いが、謙遜して口に出さない。住んでいる人たちが良いと思っていることは良いと評価をして、いろんな人に伝えながら、ここで暮らせることは凄く良いことだと思ってもらう。それをみんなでしていかないと子どもも残らないと思う。子育てが終わった方たちが多いと思うが、子どもにきちんと家庭の中で言う。押し付けるのは良くないが、池田町を残したいと思うなら一人一人が行動することが大事だ。

副町長：育児参加はどうか。

企画幹兼農村政策課長：私は参加している。忙しいというものもあるし、多世代の中で育ってきていて、親もしなかったので、自分もしないというのがあると思う。私は子育てしたいというより、物理的に2人しかおらず、妻はこちらの出身でもなく、家庭の事情で親も来られないとなると、他に動けるのは自分しかいないので必然的に参加することとなる。職場の理解もあってのことなので、社会全体で応援していく意識も大事だと思う。

委員長：確かに 18 歳未満人口の割合は注意をする必要がある。少し減少の度合いが緩やかになっていることも事実であるが、20 人学級を目標に据える限りは、この数値ではいけないことは想像できる。逆に 20 人学級を維持する、実現するためには、毎年何人子どもが必要なのかという逆算・計算はできる。子どもがいる世帯の子どもの平均人数は 1.86 人なので、それも勘案して、どういう目標を立てれば良いかということだ。最初に「人口増加問題だけが地方創生と違う」と言ったが、やはり人口維持も大事なので、子どもの数を増やす、あるいは 2 人目・3 人目の出産を躊躇している人たちを一步後押しすることと、小学校から中学校の時に転出するのは寂しいので、町内で持続的に子育てをしてもらえる環境を整えることの両面作戦が必要ではないか。

事務局：今回だけでなく、次回の教育編にも関わってくるかと思うが、池田で子育てしたい、池田で子どもに教育を受けさせたい人が増えるよう特色を出していけば子どもも増えてくるのでは。それが行政の補助や学校教育だけでは、他の自治体もしているので、特色になり切らないと思う。池田丸ごと学校とか、池田みんなで子育てのような特色というのを私たちが一緒に作っていければ魅力になると思う。ふれあいセミナーの話が出た時に、複数集落の連携で子どもの受け入れをしてみることができるのではないかという話もあったので、できることから少しづつしていくと次の展開に繋がるのかなと思う。

委員長：今まさに子どもがきてからの話というのは、「教育」の話とも当然関わってくるので、「なかま」の 2 回目以降、教育、それから自治と繋がるので、今日の内容も踏まえて協議していきたいと思う。

#### □ 次回の日程について

次回以降の日程、第 9 回が 11 月 12 日（木）で「なかま」の 2 回目、教育関係をお話しする。第 10 回が 12 月 10 日（木）で「なかま」3 回目、第 11 回は 1 月に入るが、1 月 7 日（木）、第 12 回目が 1 月 28 日（木）を予定している。

#### □ 副委員長挨拶

次回協議するが、1 学年 20 人は集団力学が働き、競い合いや助け合いや刺激など、部活動の点から必要と考える。池田の教育は特色があり、きちんと伝えられれば、魅力的な環境もあるので、池田で教育を受けたい方が増えてくると思う。

#### □ 閉会